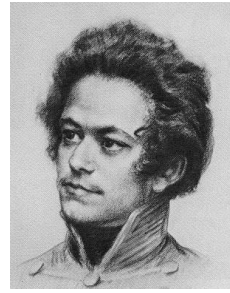
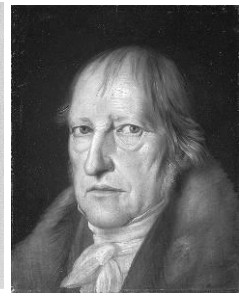


【資料1】年表 マルクス、エンゲルスの主な活動

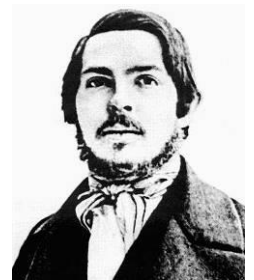
- 1818 マルクス生まれる。
- 1820 エンゲルス生まれる。
- 1841 マルクス、ベルリン大学を卒業。ヘーゲル哲学を勉強。
- 1842 マルクス、『ライン新聞』の主筆となり、民主主義の論陣を張る。エンゲルス、1年間の兵役を終え、父親が共同経営する英マンチェスターの紡績工場におもむく。
- 1843 3月、『ライン新聞』が発行禁止処分を受け、マルクスは編集部を去る。10月、パリに移って雑誌(『独仏年誌』)の発行を準備。そこにエンゲルスが論文「国民経済学批判大綱」を送ってくる。
- 1844 エンゲルス、英からの帰国途中、パリでマルクスと会い、理論的一致を確認。
- 1845 共同で『ドイツ・イデオロギー』を執筆、史的唯物論の考え方を基礎づける。
- 1847 マルクスら、「正義者同盟」(本部ロンドン)に加入。「正義者同盟」は、彼らの理論を受け入れ、大会で「共産主義者同盟」と改称。
- 1848 共産主義者同盟の綱領として、マルクス、エンゲルス『共産党宣言』刊行。直後にフランス二月革命、ドイツ三月革命が起きる。2人はドイツに帰国し、新『ライン新聞』を発行して革命の先頭に立つ。
- 1849 革命が敗北し、マルクス、エンゲルスはそれぞれロンドンに亡命。
- 1850 マルクスは大英図書館を拠点に経済学の研究を再開。 エンゲルスは、マルクスの研究と生活を支えるため、マンチェスターの工場で経営者として働く(～70年)。
- 1857 マルクス、ノート7冊にわたる経済学の草稿を執筆(「57-58年草稿」)。
- 1859 マルクス『経済学批判』第1分冊を刊行。
- 1861 マルクス、『経済学批判』続編の執筆を開始。ノート23冊にわたる研究になる(「61-63年草稿」)。
- 1864 ロンドンで国際労働者協会が設立される。マルクスはドイツ人労働者の代表として参加、創立宣言、暫定規約を起草し、運動の基礎を築く。
- 1865 マルクス、国際労働者協会中央評議会の会議で「賃金、価格および利潤」について講演。
- 1867 マルクス『資本論』第1部を刊行。
- 1870 フランス・プロイセン戦争(～71年)
- 1871 パリ・コミューンが成立(3～5月)、世界最初の労働者階級の政権。
- 1872 マルクス『資本論』第1部第2版(～73年)、フランス語版(～75年)を刊行。 国際労働者協会、ヨーロッパでの活動を終える。
- 1875 ドイツ・ゴータで2つの労働者政党が合同。マルクス、『ゴータ領批判』を執筆。
- 1877 ドイツの党内に誤った理論が広がり、エンゲルス『反デューリング論』を執筆(～78年)。
- 1878 ドイツで社会主義者取締法が成立(～94年)。
- 1880 マルクス、フランス労働党の綱領前文を口述。『反デューリング論』をもとに、エンゲルス『空想から科学へ』刊行。
- 1883 マルクス死去。
- 1884 エンゲルス、『家族、私有財産および国家の起源』を刊行。
- 1885 エンゲルス、『資本論』第2部を刊行。
- 1886 エンゲルス、『フォイエルバッハ論』を発表。
- 1894 エンゲルス、『資本論』第3部を刊行。
- 1895 エンゲルス、「マルクス『フランスにおける階級闘争』序文」を発表(4月)、死去(8月)。



学生時代のマルクス

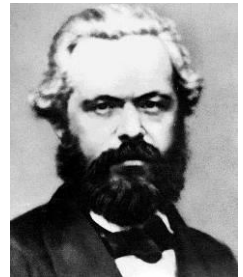


ヘーゲル(1770-1831) ドイツの哲学者。主著『大論理学』『エンサイクロペディア』『法哲学』



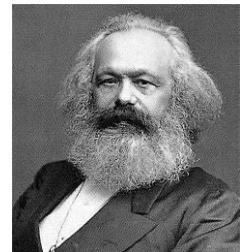
エンゲルス(1840年)

1853 ペリー来航



マルクス(1861年)

1868 明治維新



マルクス(1875年)

【資料2】 観念論から唯物論へ

「あるけなげな男が、かつて、人間が水におぼれるのは彼らが重力の思想に取りつかれているからでしかないと思い込んだ。彼らが、たとえばこの観念を迷信的な観念、宗教的な観念と言明することによって、それを頭から追い払えば、彼らはすべての水難をまぬかれる、というのだ。生涯にわたって、彼は、重力の幻影とたたかった……。このけなげな男こそが、ドイツの新しい革命的哲学者たちの典型であった。」

(「ドイツ・イデオロギー」序文、1845～46年執筆。古典選書『ドイツ・イデオロギー』10ページ)

【資料3】 マルクスの弁証法的方法

「私の弁証法的方法は、ヘーゲルのそれとはただ単に根本的に異なっているのではなく、それとは正反対のものである。ヘーゲルは思考過程を理念という名のもとに1つの自立的な主体にさえ転化したが、彼にとってはその思考過程が現実的なものの創造者であって、現実的なものはただその外的現象でしかない。私にあっては反対に、観念的なものは、人間の頭脳のなかで置き換えられ、翻訳された物質的なものにほかならない。

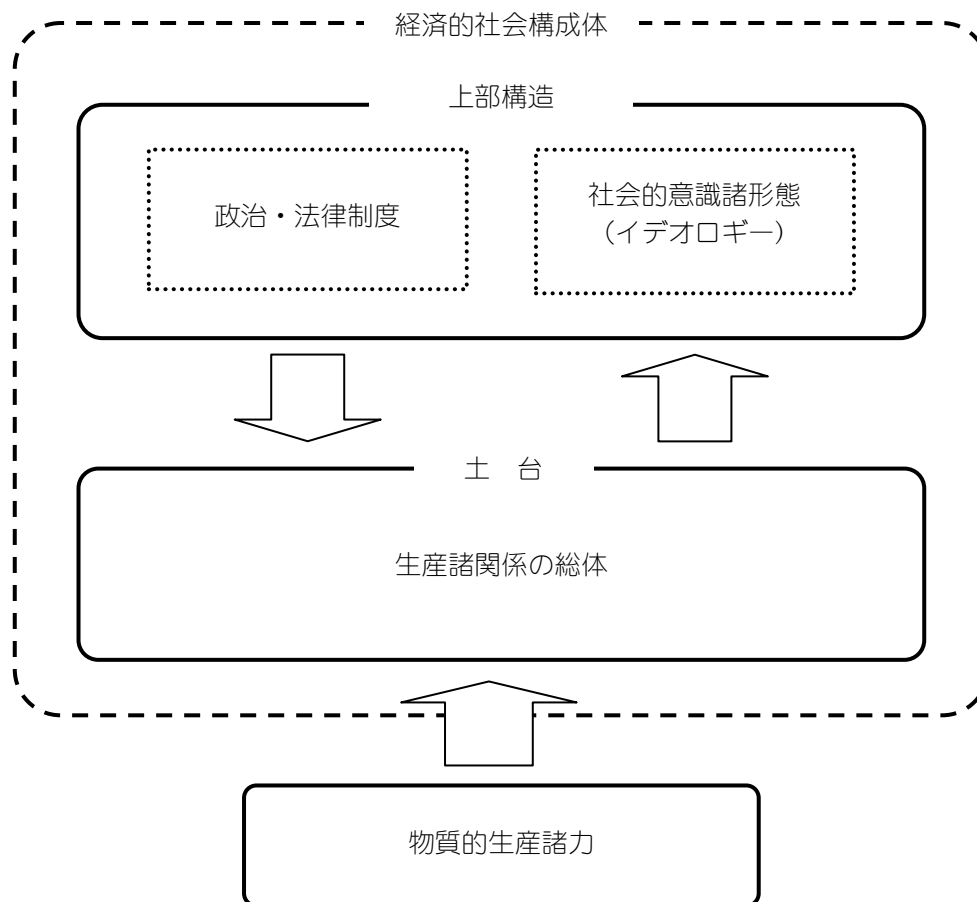
……弁証法がヘーゲルの手のなかでこうむっている神秘化は、彼が弁証法の一般的な運動諸形態をはじめて包括的で意識的な仕方でも叙述したということ、決してさまたげるものではない。弁証法はヘーゲルにあってはさか立ちしている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならない。

その神秘化された形態で、弁証法はドイツの流行となった。というのは、それが現存するものを神々しいものにするように思われたからである。その合理的な姿態では、弁証法は、ブルジョアジーやその空論的代弁者たちにとっては、忌まわしいものであり、恐ろしいものである。なぜなら、この弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、できあがったどの形態をも運動の流れのなかで、したがってまたそれが過ぎ去って行くという側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的であるからである。」

(マルクス『資本論』第2版へのあと書き) 1873年、『資本論』新日本新書①28～29ページ)

【資料4】 史的唯物論の基本的な考え方

① 経済を土台にして社会をとらえる（土台・上部構造）

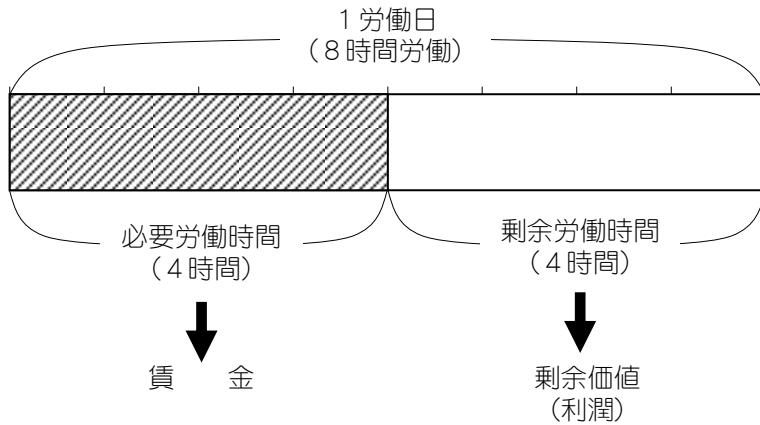


② 人類の歴史のこれまでの発展段階（「経済的社会構成体の前進的諸時代」）

<p>原始共同社会 〔アジア的生産様式〕</p>	<p>人類社会の最初の段階。人々は共同体（氏族）に属し、生産手段は共同で所有。みんなで働き、生産物もみんなで分ける。搾取も階級も存在しない社会。</p>
<p>奴隷制社会 〔古代的生産様式〕</p>	<p>奴隷所有者が、生産手段とともに労働者（奴隷）も所有し、奴隷を働かせて搾取する。奴隷は「ものを言う道具」として奴隷所有者に全人格的に隷属させられている。</p>
<p>封建制社会 〔封建的生産様式〕</p>	<p>農民は、農具などは自分で所有するが、土地は封建領主（たとえば大名）が所有。領主は、農民を身分制度で土地に縛りつけて、領主の農園で働かせたり生産物を年貢として取り立てたりする。</p>
<p>資本主義社会 〔近代ブルジョアの生産様式〕</p>	<p>生産手段（工場や機械）は資本家が所有。生産手段をもたない労働者は、自分の労働力を資本家に売って賃金を得て生活する。資本家は、賃金を支払った労働者を工場で働かせ、剰余価値を手に入れる。</p>

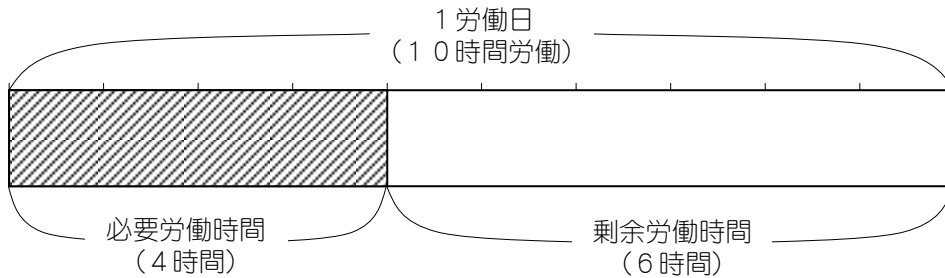
【資料5】搾取の仕組み

①基本図

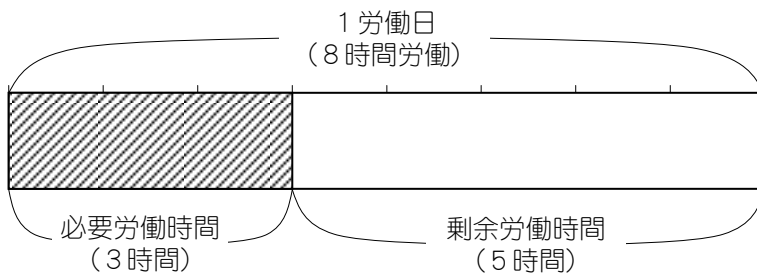


$$\begin{aligned}
 & \text{剰余価値率 (搾取率)} \\
 &= \frac{\text{剰余労働時間}}{\text{必要労働時間}} \\
 &= \frac{4 \text{ 時間}}{4 \text{ 時間}} \\
 &= 100\%
 \end{aligned}$$

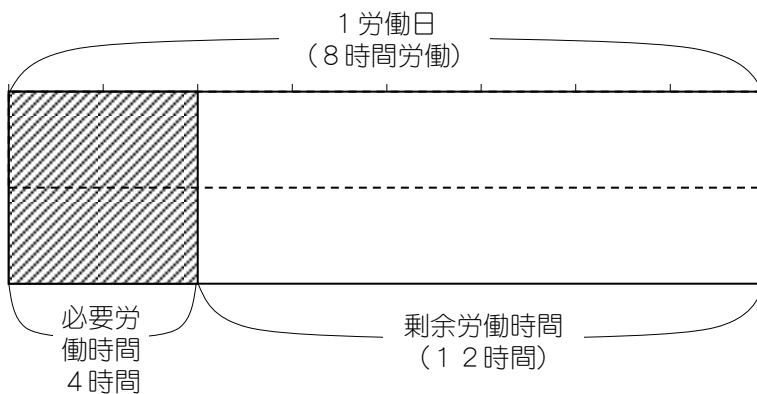
②労働時間を延長する (絶対的剰余価値の生産)



③必要労働時間を短縮する (相対的剰余価値の生産)

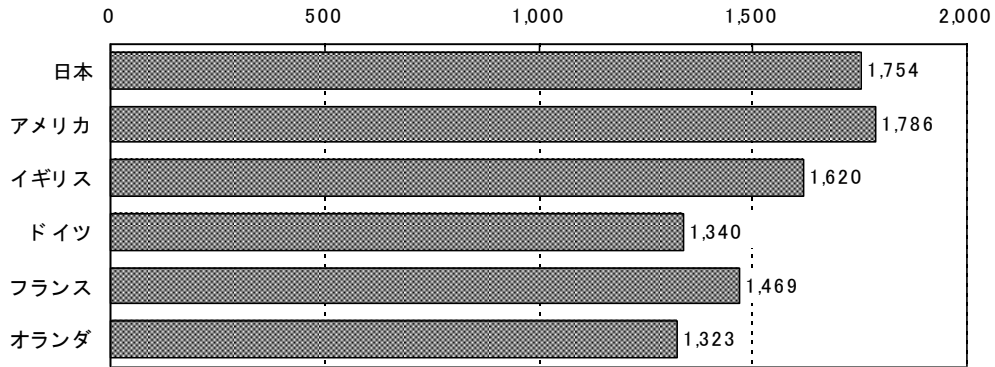


④労働の強化 (労働の強度を上げる)



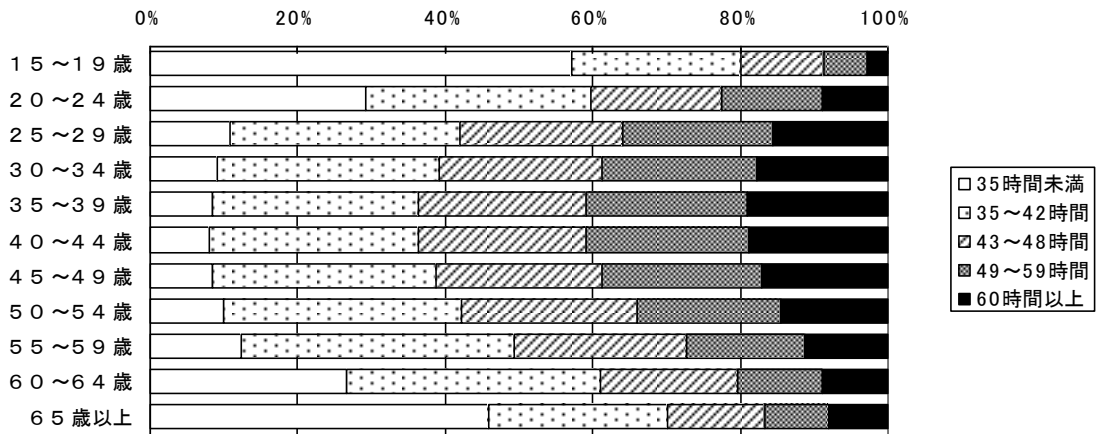
【資料6】日本の搾取の実態

①平均年間総労働時間の国際比較（2010年、雇用者、単位：時間）



(「データブック国際労働比較 2012」)

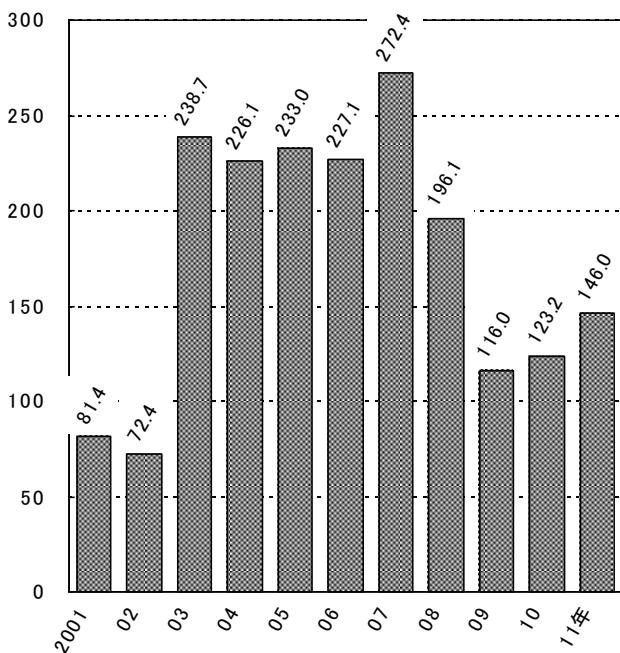
②年齢階層・週労働時間別の割合（男性）



(総務省「2011年労働力年報」から作成)

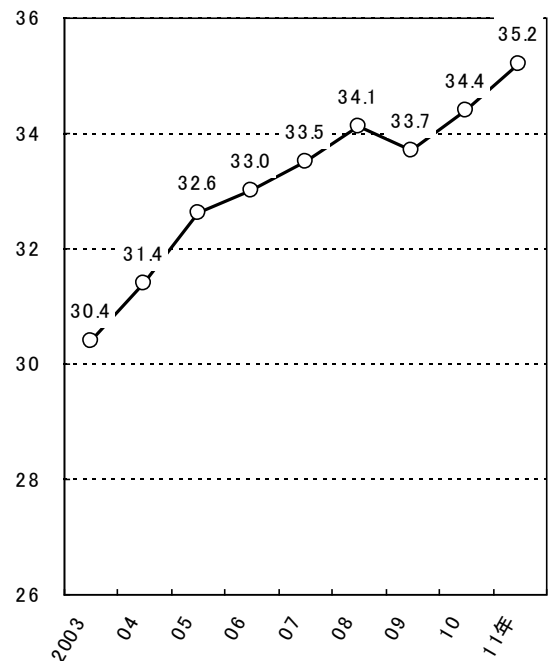
③サービス残業（未払い賃金）の是正額

(単位：億円)



(「しんぶん赤旗」2012年12月4日付)

④非正規の職員・従業員の割合（単位：％）



(総務省「2011年度労働力調査(詳細集計)」)

【資料7】 “大洪水よ、わが亡きあとに来たれ！”

「大洪水よ、わが亡きあとに来たれ！」 これがすべての資本家およびすべての資本家国家のスローガンである。だから、資本は、社会によって強制されなければ、労働者の健康と寿命にたいして少しも注意を払おうとしない。……しかし、全体として見れば、このこともまた、個々の資本家の善意や悪意によるものではない。自由競争は、資本主義的生産の内在的な諸法則を、個々の資本家にたいして外的な強制法則として通用させるのである」（『資本論』第1部第8章「労働日」、新書版②464 ページ）

【資料8】 「社会的バリケード」をたたかいとる

「わが労働者が、生産過程にはいったときは違うものとなって、そこから出てくるということを、人は認めなければならない。市場では、彼は、『労働力』商品の所有者として他の商品所有者たちと相対した。商品所有者が商品所有者と相対したのである。労働者が自分の労働力を資本家に売るときに結んだ契約は、彼が自分自身を自由に処分するものであることを、いわば白い紙に黒い文字で書きとめたように明白に示していた。取り引きが完了したあとになって、労働者は『なんら自由な行為主体でなかった』こと、彼が自分の労働力を自由に売る時間は、彼がそれを売ることが強制されている時間であること、実際には、彼の収奪者は『一片の筋肉、一本の腱、一滴の血でもなお搾取することができる限り』手放しはしないこと——これらのことが明らかになった。責め苦の蛇にたいして『身を守る』ために、労働者たちは結集し、階級として1つの国法を、1つの強力な社会的バリケードを、奪取しなければならない。それは、労働者たち自身が、資本との自由意思にもとづく契約によって、自分たち自身とその一族を、死と奴隷状態とのなかに売り渡すことを阻止するものである。『譲ることのできない人権』の派手な目録に代わって、法律によって制限された労働日というつましい大憲章（マグナ・カルタ）が登場する。それは『労働者が販売した時間がいつ終わり、彼ら自身のものである時間がいつ始まるかをついに明確にする』。なんと大きく変わったことだろう！」（『資本論』第1部第8章「労働日」、新書版②524～525 ページ）

【資料9】 「否定の否定」と個人的所有の再建

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、したがって資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果——すなわち、協業ならびに、土地と労働そのものによって生産された生産諸手段との共同占有——の基礎の上に個人的所有を再建する。」

（『資本論』第1部第24章「いわゆる本源的蓄積」、新書版④1306 ページ）

【資料10】 マルクスは一貫して人間の自由の発展を追求してきた

① 『ドイツ・イデオロギー』（1845～46年）

「各人が活動の排他領域を持たず、むしろそれぞれの任意の部門で自分を発達させることのできる共産主義社会においては、社会が全般的生産を規制し、そして、まさにそのことによって、私は今日はこれをし、明日はあれをすることが可能になり、狩人、漁師、牧人、あるいは批判家になることなしに、まさに好きなように、朝には狩りをし、午後には釣りをし、夕方には牧畜を営み、そして食後には批判をすることが可能になる。」（古典選書『ドイツ・イデオロギー』44 ページ）

② 『共産党宣言』（1848年）

「階級および階級対立をもつ古いブルジョア的社会的代わりに、各人の自由な発展が、万人の自由な発展のための条件である連合体〔アソツィアツィオン〕が現われる。」（古典選書『共産党宣言／共産主義の諸

③「自由な個性の発展」(『1857～58年草稿』)

「人格的な依存諸関係(最初はまったく自然発生的な)は最初の社会諸形態であり、この諸形態では、人間の生産性は狭小な範囲においてしか、また孤立した地点においてしか展開されない。

物的依存性のうえにきずかれた人格的独立は第二の大きな形態であり、この形態において初めて、一般的社会的物質代謝、普遍的諸関連、全面的諸欲求、普遍的諸力能といったものの1つの体系が形成される。

諸個人の普遍的な発展の上にきずかれた、また諸個人の共同体的、社会的生産性を諸個人の社会的力能として服属させることの上にきずかれた自由な個性は、第3の段階である。第2段階は第3段階の諸条件をつくりだす。」(大月書店『資本論草稿集①』138ページ。原文は改行なし)

④『資本論』第一部(1867年)

「共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に1つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」(第1章「商品」、新書版①133ページ)

「各個人の完全で自由な発展を基本原理とする、より高度な社会形態」(第22章「剰余価値の資本への転化」、新書版④1016ページ)

⑤「自由の国」と「必然性の国」(『資本論』第3部)

マルクスは人間の活動領域全体を「自由の国」と「必然性の国」に分けた上で、人間社会の発達によって、この2つの領域がどうなるかを概括して次のように述べた。原文を要約・整理。

——「自由の国(領域)」は、物質的必要性や外的目的適合性によって規定される労働が存在しなくなるところで、初めて始まる。だからそれは、本来の物質的生産の領域(「必然性の国」)の彼岸、それが終わった先にある。

——人間は、自分の諸欲求を満たし、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならない。それは、文明の発展が低い場合でも高い場合でも同じである。社会主義・共産主義の未来社会を含めて、人は、すべての社会諸形態、すべての生産諸様式のもとで、そういう自然との格闘をしなければならない。人間の発達とともに欲求の範囲も拡大するから、この「自然的必然性の国」は拡大する。しかし同時に、この欲求を満たす生産力も拡大する。

——この「必然性の領域」における自由がどこにあるかと言えば、それは、人びとが、盲目的な支配力としての物質代謝(物質的生産)によって支配されるのではなく、自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくところのみ存在する。それは、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうということである。しかし、そのようなもっとも合理的で人間的な生産が行なわれたとしても、それは依然として「必然性の国」の話である。

——この「必然性の国」の彼岸において、人間の能力の発達それ自体が目的とされる「真の自由の国」が始まる。といっても、それはただ、「必然性の国」を基礎として、その上にもみ開花することができる。そのための根本条件は「労働日の短縮」である。

(第48章「三位一体的定式」、新書版③1434～1435ページ参照)

【資料 1 1】普通選挙権と労働者政党

○エンゲルス「共産主義者とカール・ハインツェン」(1847年10月)

カール・ハインツェン(1809~99)はドイツの政論家。1848年の革命に先立つ時期に、民主主義派の代表を自称して、共産主義攻撃の論陣を張った。

「民主主義はすべての文明国においてプロレタリアートの政治的支配を必然的にもたらす。そしてプロレタリアートの政治的支配は、あらゆる共産主義的施策の第1前提である。」(全集④333ページ、「ブリュッセル・ドイツ語新聞」に発表)

○エンゲルス「共産主義の諸原理」(1847年10~11月)

「共産主義の諸原理」は、共産主義者同盟の綱領審議のなかで、パリ班の草案としてエンゲルスが起草したもの。

「第18問 この革命は、どのような発展の道をとるであろうか？」

答——それは、なによりもまず、民主主義的国家体制を、そしてそれとともに、直接または間接に、プロレタリアートの政治的支配を樹立するであろう。プロレタリアがすでに人民の多数をなしているイギリスでは直接に、人民の多数がプロレタリアだけでなく、小農民および小市民から成り立っており、この小農民および小市民は、まさにようやくプロレタリアートへと移行しつつあって、彼らのすべての政治的利害がますますプロレタリアートに依存するようになり、したがってまもなくプロレタリアートの諸要求に結びつかなければならないフランスおよびドイツでは間接に、である。」(古典選書『共産党宣言／共産主義の諸原理』131ページ)

○マルクス「チャーティスト」(1852年)

「普通選挙権は、イギリスの労働者階級にとっては政治的権力と同意義のものである。というのは、イギリスではプロレタリアートが人口の大多数を占め、公然とはやられなかったにせよ長い内乱のなかで、階級として自己の立場の明確な意識を得ており、農村地帯にさえももう農民はみられず、ただ地主と産業的な資本家(借地農場経営者)と雇用労働者とがみられるだけだからである。したがって、イギリスにおける普通選挙権の実施は、ヨーロッパ大陸で社会主義的方策の名で尊ばれてきているどんなものよりも、はるかに社会主義的な一方策となるであろう。

この場合、このことの不可避的な結果は、労働者階級の政治的制覇である。」(全集⑧336~337ページ、「ニューヨーク・デイリー・トリビューン」に発表)

○マルクス「行政改革協会——〔憲章〕」(1855年)

「イギリスでは、普通選挙権は、一方に貴族およびブルジョアジーと、他方に人民所階級とのあいだの広大な仕切線をなしている。……それは人民所階級の憲章であり、彼らの社会的要求を実現するための手段としての政治権力の獲得を意味している。だから普通選挙権は、1848年にフランスでは一般的友愛の合言葉として理解されたのに、イギリスにおいては戦いの合言葉と解されているのだ。フランスでは革命の当面の内容が普通選挙権であった。が、イギリスでは普通選挙権の当面の内容が革命なのである」(全集⑩266~267ページ、「新オーダー新聞」に発表)